

失敗を経験に

校 長 武井 正明

先日の新潟県アンサンブルコンテスト。聴きながらヒヤッとした瞬間があった。
見事金賞を受賞、代表選考会にも選ばれた「スペイン嬉遊曲〈管弦打楽器8重奏〉」
その演奏中に、トランペットの音を抑えるミュートを落としてしまったのだ。

本人が一番肝を冷やしただろう。カタンッという音がした瞬間、
私の息は止まり、鼓動がバクバクいったくらいだったのだから。

しかし、彼女は実に落ち着いていた。冷静にさりげなく拾い上げて
取り付けなおすと、演奏にスッと再合流したのだ。

この対応力がすごいなと思った。



周りのメンバーも冷静だった。アクシデントに気づき、自分のパートをしっかりと務め
つつ、仲間が合流するタイミングを図り、無事一緒の波に乗せることができた。

私はこの瞬間を見られただけでも大収穫だと思った。そこからは圧巻だった。畳み掛け
るような演奏に、彼らの粘り、執念、底力を見た気がした。

よくミスがミスと呼ぶ、という。スポーツの世界ではよくあることだ。最初に思わぬミ
スをしてしまう。それに驚いて慌て、焦るうちに次なるミスを誘発してしまう。ミスは二
度続くと致命傷になるものだ。大体はそこで終わってしまうことが多い。

私は野球部の大会で、ゴルフの競技会で、そして何より教育現場で、数えきれないほど、
そういう失敗を繰り返してきた。

失敗を失敗で終わらせ「後悔」にしてしまうのか、最小限に食い止めてそこから立て直
し挽回し、成功させ「経験」に変えることができるのか、この差が実はかなり大きい。

失敗に鈍感な人はすぐに謝ってしまうという。失敗に敏感な人は、常に自分の力量を疑
っている。起こり得るあらゆる場面を想定して、何度も準備し、練習を積み重ねる。

きっと彼女にとって、今回のアクシデントは「想定内」だったのだろう。

先日の選挙演説会での彼女の緊張の経験も、少なからず生かされた
に違いない。つまり、人生に無駄なことなどひとつもなく、総てが繋
がってその人を作る、ということだ。



そして今後、同様の事態に直面した際、彼女は思うのだ。

ああ、これはいつか経験した時のあれと似てるな。でも大丈夫。あの時乗り切ってきた
じゃない。今回も頑張ってきたと乗り越えていけるはずだよ、と。

それは彼女が今後の人生に向けて、「自信」という大きな財産を得た瞬間だった。